＼太田川を 知ること・見ること・知り合うこと／
太田川水系をネットワークする情報誌
TEKU TEKU おおたがわ
てくてく太田川
配布地域：磐田市・袋井市・森町・掛川市 他
第24号
2025
令和7年3月1日
発行部数 111,000部

特集
太田川水系の七夕豪雨
あの日から50年

1974年（昭和49年）7月7日から8日未明にかけて、一日に500ミリ以上の大雨が降りました。静岡県全域に大きな被害をもたらしたこの豪雨は「七夕豪雨」と呼ばれ、2024年がちょうど50年目でした。「七夕豪雨」といえば静岡・清水での被害が注目されますが、今回は袋井市今井地区横井の太田川堤防の決壊にスポットをあて、当時袋井市消防として現場に入った永田進さんから体験談を伺いました。

太田川増水に警戒せよ！

袋井市横井
永田 進

その日は参議院議員と県知事の選挙投票日。午後3時頃から雨が強くなり、夕方過ぎには豪雨になりました。朝から袋井消防署に勤務していた私は夜11時半頃、袋井土木事務所から緊急連絡を受けました。「上流の森町大河内で豪雨。2時間後の太田川増水に警戒せよ！」

関係各所に連絡後、妻から電話があり、「今、有線聞いたけど、逃げ遅れちゃった。助けて！」と…。私は「なぜ早く逃げなかったんだ！」ときつく怒鳴ってしまいました。

上司からの指示で同僚と横井に向い、途中自治会班長と出会い自宅に急行。冠水した道路を進み、やっとの思いで自宅に着くと、2人の子どもと恐怖と不安でおびえる妻がいました。同僚に1歳半の長女を託し、私は生後1か月の次女を毛布でくるんで避難開始。北の方向から轟音がしたため南へ進みました。暗闇の中、水深は腰、胸、首へと徐々に深くなり、妻は履物を流され素足で傷だらけ、道がどこかわからず電柱を頼りに、泳ぐように東名までたどり着いたものの、東名の南へ抜けようと考えていたアンダーパスは濁流が渦巻く川と化していました。

まずいと思ったその時、妻がこの濁流に足をとられ濁水に飲み込まれ見えなくなりました。「もうだめか！」と覚悟を決めた数秒後、妻は再び浮上り、必死で伸ばした右手中指が金網（写真）にひっかかりました。その後、同僚が投げたロープに捕まり濁流から脱出。全員が東名の斜面に這い上がり、間一髪のところで助かりました。

▲現在の東名の金網の前で（家族4人で）

まさかの太田川堤防の決壊

横井周辺ではそれほどの雨ではなくなっていたのに、土木事務所の通報どおり太田川の水位はみるみる上昇。所々で水が溢れるとともに堤防が少しずつ欠け出し、8日午前2時40分頃には、延久と横井の堤防2箇所があっという間に決壊しました。当時30戸足らずの横井集落のど真ん中に突如として川ができ、公会堂を含む5軒が流され、その中には約180mも下流に流された家屋もありました。その他全ての家が床上まで浸水し、家財のほとんどが流出するお宅も続出、道は寸断され、集落全体が土砂に埋まり、想像を超える惨状でした。

物的被害は甚大でしたが、それでも横井では一人の死者も出ませんでした。それは、農協の有線放送による警戒情報が功を奏し、ほとんどの住民が今井農協などへ自主避難していたからでした。

私は当時26歳、1年前に家を新築し、2人の女子にも恵まれ順風満帆でしたが、まさか自宅に救助に向かうとは思いもせず、水に対する無防備さを悔いました。

50年前のこの貴重な体験は、私だけのものではありません。太田川低地はじめ、水害リスクのある場所に住む人達全員が教訓とし、自分の生命財産を守るため、次世代へ引き継いでいく必要があると思います。そんな思いで、在職中に袋井市防災史の発行に携わりました。機会があれば是非手に取りご一読ください。

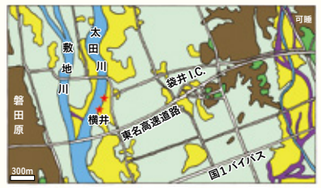
▲当時使われていた有線電話
底板にスピーカーとボリュームがある

▲昭和49年の太田川と堤防の決壊箇所

第12回 青島晃の てくてく地質学講座

ふじのくに地球環境史ミュージアム 客員研究員 青島 晃

太田川低地の地形の成り立ちと洪水堆積物



▲図1 地形分類図 ※国土地理院治水地形分類図より引用加筆

七夕豪雨より以前にも太田川で洪水はあったのでしょうか？

図1は太田川低地の地形分類図で、太田川や敷地川の両側を黄色で示した部分は自然堤防と呼ばれ、図2のように河道よりやや高く、砂質で形成された地形です。この自然堤防のでき方は次のとおりです。

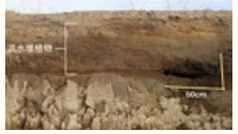
① 大雨などで河川の水量が増すと、普段より多くの土砂が下流に運ばれます。

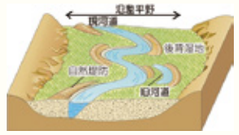
② 河川の水が洪水により河道からあふれると、流速が急激に低下するため、河道の外側に砂などが堆積します。

③ 洪水を繰り返すと、河道の外側に周囲よりわずかに高い砂地の自然堤防ができます。

このように太田川に沿って自然堤防が見られることは、過去にも繰り返し洪水が発生したことが、地形からも読み取れます。その例として図3は袋井市西向遺跡で見つかった江戸時代の洪水堆積物です。自然堤防は、一旦できると周辺に比べて水はけが良いため、古くから集落や畑地、街道などがつくられてきました。また、自然堤防は、洪水時には水面から島状に取り残されることから、特に太田川低地では、西島や彦島、東小島などのように○○島という地名の由来となっています。

一方、図1の右側の紫色の線は、昔の太田川の流路で、旧河道と呼ばれています。大規模な土木工事のなかった時代には、太田川は流路を変えながら蛇行して低地を流れ下っていたことも分かります。


▲図3 江戸時代の洪水蓄積物
（袋井市西向遺跡）



▲図2 河川中流域の地形
※地学基礎（2016・啓林館）より引用加筆

編集後記

みんなで取り組む「流域治水」

袋井土木事務所 河川改良課 小菅摩紀

近年、自然災害が頻発しており、治水対策を上回る速度で気候変動の影響が表れています。施設の能力には限界があるため、集水域や氾濫域も含めてひとつの流域として捉え、その流域全体のあらゆる関係者が協働し、流域全体で洪水氾濫に備える、「流域治水」が必要になってきました。

てくてく太田川第24号は太田川水系の七夕豪雨を取り上げました。体験者に記憶された鮮明な経験談を残し、取材を通して受け取ったメッセージを伝え、これからの防災へ繋げるような価値のある情報をお届けすることを使命と考え、会議を重ねました。

本号をご覧いただくことで、太田川流域で生活している皆様に水災害を自分事に感じていただき、流域治水の取り組みに繋げるとともに、防災意識の向上になれば幸いです。

まもり 治水の要 ～流域治水～

しぞ～か防災かるた

～しぞ～か防災かるた 豪雨の備え編～ 袋井商業高校が、かるた作りに参画

2024年、静岡県では七夕豪雨から50年の節目となる機会に、「流域治水」をテーマとして、流域治水シンポジウムや、パネル展示などのイベントが行われました。これらのイベントの中で特に目を引いたのは、静岡県土木防災課が企画し、しぞ～か防災かるた委員会の協力を得て制作している「しぞ～か防災かるた（豪雨の備え編）」です。

「しぞ～か防災かるた委員会」では、今までに静岡市版（2012年発行）と静岡県版（2022年発行）の2種類を制作したそうです。

今回は流域治水PRの一環として県に協力して、制作されることから「豪雨の備え編」と命名されたそうです。

県内を4地域に分け、6月の中部（静岡大学）をかわきりに、7月は東部（県立富士東高校）と西部（県立袋井商業高校）、9月に賀茂（県立稲取高校）で句づくりワークショップを開催し、句の材料を集めました。

袋井商業高校でのワークショップには、てくてくメンバーから3人が参加させていただき、高校生の皆さんと一緒に、句づくりを楽しみました。

「しぞ～か防災かるた」は、子どもから大人まで、楽しみながら地域の特性を再認識し、防災知識や意識を自然に身につけられます。年齢や性別を越えたコミュニケーションが生まれる点も魅力ですね。このかるたを通じて、水災害を自分事（「じぶん」こと）と捉え、流域治水の取り組みが進むことを期待しています。

さて、どんなかるたが出来たのか…。

「しぞ～か防災かるた（豪雨の備え編）」についてのお問合せはこちら
静岡県交通基盤部
河川砂防局 土木防災課
mail：dobokubousai@pref.shizuoka.lg.jp

「しぞ～か防災かるた」について詳しくはこちら
しぞ～か防災かるた委員会HP

編集局員 野中大輔

図書カードが当たる!! 2025 てくてく太田川 ものしりクイズ

七夕豪雨があったのは何年でしょうか？
①1964年　②1970年　③1974年

正解を応募いただいた方の中から図書カード3,000円分を抽選で10名の方にプレゼント！ふるってご応募ください！

【応募方法】上記QRコードからWEBで回答または電子メール、FAX、郵便ハガキのいずれかの方法で、必要記載事項をご記入のうえ応募してください。
応募先は、右記の **静岡県袋井土木事務所 河川改良課「ものしりクイズ応募係」** まで

【記入事項】①クイズのこたえ ②住所 ③氏名 ④年齢 ⑤職業 ⑥電話番号 ⑦「てくてく太田川第24号」をどこで入手しましたか？ ✓新聞折込 ✓回覧・広報 ✓公共施設 ✓観光施設 ✓その他（場所を記載） ⑧第24号を読んで新たな発見や感想等

【応募締切】2025年5月31日 当日消印有効

【当選発表】当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

※ご記入いただいた個人情報につきましては、管理責任者を定め、紛失や漏洩が発生しないように努めます。また、上記の利用目的のみに使用し、第三者に提供することはございません。

DOBO CLUB 静岡どぼくくらぶ

編集局員を募集しています！

編集会議では、新しい出会いや知識共有の場を提供します！！
磐田市、袋井市、掛川市、森町にお住まいの方、編集会議に参加しませんか？

ご意見、ご感想をお送りください。また、太田川水系の川に関する情報や、感動的な写真もあわせて募集します。太田川情報編集局事務局まで。

ブログ・Facebook もやってます!!
てくてく太田川　検索

てくてく太田川のバックナンバーはこちらから

発行日 2025年3月1日
発行者 静岡県袋井土木事務所
〒437-0042 袋井市山名町2番1号
TEL 0538-42-3289　FAX 0538-43-0919
E-mail:fukudo-kasen@pref.shizuoka.lg.jp
URL:http://doboku.pref.shizuoka.jp/desaki/fukuroi/
@FUKUDO_SHIZUOKA
編集 太田川情報編集局 袋井土木事務所 河川改良課内
編集局員 磐田市 青島 晃 安間美恵子 大石佳典 増田 晃
袋井市 浅羽俊光 小菅摩紀 三谷真史 鈴木敦子 鈴木恭平 鈴木仁美 門名親宏 寺田公嘉
掛川市 安藤凱夫 鈴木健太 野中大輔 武藤君幸
森 町 岡庭 彩 辻 克美

体験者から学ぶ 七夕豪雨

太田川堤防決壊による被害の体験者と、当時の静岡県土木職員の方々から、被害の状況や改修工事、復興の歩みなど貴重なお話を伺いました。

そのお話から、太田川情報編集局メンバーが感じたこと、学んだこと、考えたことをレポートします。

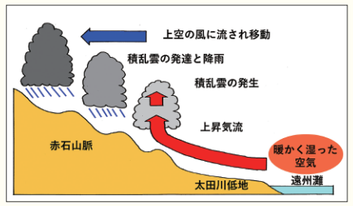
上流で降った雨で水位が急上昇

当時、袋井市今井地区に住まいがあり被災された永田さんのお話によると、堤防が決壊した頃、今井地区ではほとんど雨は降っていなかったといいます。それではなぜ水位が上昇し、堤防決壊が起こったのでしょうか。

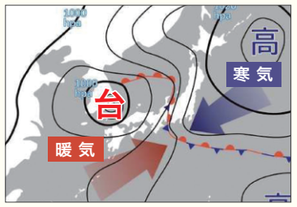
発生当日の天気図によると、沖ノ島近海で発生した台風8号は、7月7日夕方には、対馬海峡を通過して日本海中部に達しました。一方、梅雨前線は、台風8号の進行に合わせるように、伊勢湾から静岡県西部に達しました（図1）。

台風の影響により、南西から温かく湿った空気が大量に流れ込みました。赤石山脈にぶつかって上昇気流となり、次々と積乱雲を作って、今でいう線状降水帯が発生（図2・3）。この結果、県西部から中部を中心に大雨となりました。太田川水系では、森町上流の大河内で24時間降水量491・5ミリを記録しました（図4）。

上流で短時間に降った雨が、下流へと一気に流れてきたことが推測されます。



▲図2　積乱雲と降雨のでき方　図：青島晃



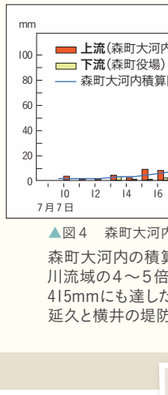
▲図1　1974年7月7日21時 地上天気図
※静岡県河川防災局（2024）より引用加筆

七夕豪雨とは？

正式名称は「昭和49年7月7日から8日にかけての台風8号及び梅雨前線による大雨」とされ、静岡県内に甚大な被害をもたらしました。

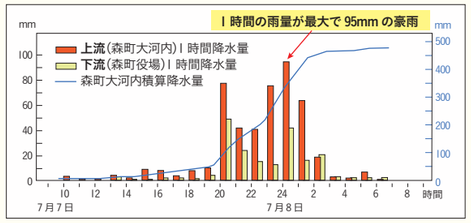
静岡市では24時間降水量508mmを記録。県内被害としては床上浸水26,452棟、床下浸水54,092棟、死者44人、負傷者241人。

最も被害が大きかったのは静岡市（旧清水市含む）の巴川流域でしたが、太田川流域においても各地で浸水等の被害に見舞われました。



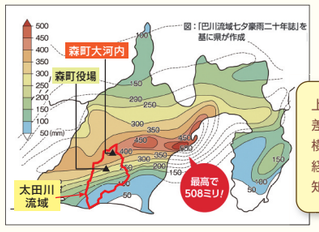
遠州灘の南から暖かく湿った空気が、赤石山脈にぶつかって上昇し、森町大河内から静岡市にかけて、今でいう線状降水帯が発生しました。これが静岡県の豪雨災害のパターンのひとつのようです。

編集局員 青島晃



▲図4　森町大河内・森町役場の降水量の時間変化

森町大河内の積算降水量は491.5mmで、これは下流の太田川流域の4～5倍であった。特に20時～3時までの7時間に415mmにも達した。1時間雨量95mmの2時間後あたりに、延久と横井の堤防が決壊した。



▲図3　雨量分布図（7月7日9時～8日9時）
※静岡県河川防災局（2024）より引用加筆

上流で降った雨は時間差で到達する！
横井の人達は、過去の経験から、この事を知っていました。

永田進さん

近所で助け合う姿

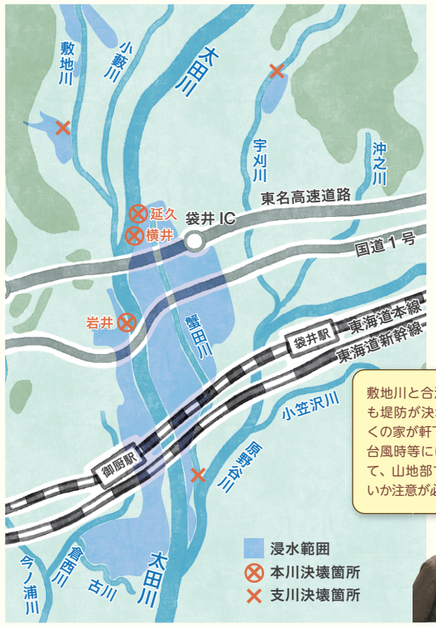
近所に声をかけて避難したという永田さん。被災後は、隣の自治会がすぐに炊き出しを行ってくれたり、中学生がボランティアで片づけを行ったり、至る所で助け合う姿が見られたそうです。昔に比べて、近所付き合いが希薄になった今はどうか。日頃の行動をあらためて見直したいという感想が多く見られました。

▲炊き出しや片づけを行っている様子。

豪雨の後の取り組みと安全な暮らし

この七夕豪雨がきっかけのひとつとなり、太田川ダムの建設は始まりました。2009年より供用開始、市民の暮らしの安全度は高まりました。

「ただ、それで安心しきっていはいけない。」と土木事務所OBの守屋さんはいいます。昨今の気候変動を考えれば、想定外の降雨量があっても不思議はない。ダムが蓄えられる水量には限りがあるという事を教えていただきました。



▲七夕豪雨における浸水範囲・堤防決壊箇所 ※現在の地図に記載

守屋文雄さん

敷地川と合流した磐田市岩井でも堤防が決壊し、家屋流失や多くの家が軒下まで浸水しました。台風時等には平野部の雨に加えて、山地部で豪雨になっていないか注意が必要です。

堤防の復旧、改修工事の様子

▲国土地理院：昭和45年5月22日

▲国土地理院：昭和51年9月15日

決壊の4年前の空撮写真では、河川敷に民有地が残り未改修だった様子が伺える。堤防決壊から2年後には、堤防の復旧工事とともに改修工事が進められ新しい構造物ができているのが分かる。

堤防決壊時未改修だった太田川の河川改修工事に携わりました。約2年で工事は完了しました。

高木輝章さん

座談会に参加した七夕豪雨体験者、静岡県袋井土木事務所OBの方、編集局員

七夕豪雨体験者
永田進さん

袋井土木事務所OB
高木輝章さん
原田悦寿さん
鈴木幸雄さん
守屋文雄さん
伊藤孝さん
原隆一さん

七夕豪雨体験のお話を聞いて…学びを活かす！

平時から情報入手に慣れておこう！

編集局員 大石佳典

横井の堤防決壊で死者が出なかった理由のひとつが、有線放送に必要な天気予報や地域のニュースなどが流れ、住民にとって身近な存在であり、つけっぱなしのラジオのようなもので、自然に避難情報も聞くことができ迅速な避難ができたのだと思う。

今、私のスマホにはNHKニュース防災、静岡県防災アプリがインストールされている。命を守る情報が詰まっている。情報は常に提供されている。

これらのアプリは、平時にも役に立つ情報が満載だ。日常的に利用し、災害時に備えたらどうだろうか。

使い方がわからなければ若い人に聞けばいい。そこに、また新しいコミュニティがうまれるのではないだろうか。

コミュニティの重要さを再認識

編集局員 鈴木敦子

今回取材で50年前の七夕豪雨災害を学ぶ機会を得た。

当時は高校生で、翌朝偶然、東名高速道路より被害を目撃した。太田川周辺が水に浸かっていたその光景は強く記憶に残っている。今回、被害の様子を詳しく聞いた。複数の堤防決壊により、甚大な被害があったということが衝撃だった。

近隣で声をかけ合ったことが、迅速な避難に繋がったようだ。今は、時代の変化により地域の行事は限られ、祭りなどの参加者も減っている。年々、近所付き合いが薄れていると感じているが、防災という観点からも、コミュニティの重要さを再認識した。

備えること逃げること

編集局員 寺田公嘉

体験談の中で印象に残った言葉がある。「人が暮らす集落の夜真っ暗中に突如として川ができ、押しつぶされた。」「暗闇の中必死になって逃げ、泥水にのみ込まれもう駄目だと思った…。」「昭和19年の大地震で家屋は全壊、30年後の夜水害で流失とはどういう運命か残念至極だった。」「自然はこれ程の力、恐ろしいものを持っていたのかまざまざと見せつけられた思いがした。」生死を分ける緊迫した状況がひしひしと伝わってきた。

早めの避難はまだ生きる可能性がある。しかし、「早く逃げろ」はもう生きるか死ぬかの境目に近づいてる。自分の命は自分で守るということは、自治会の防災訓練、避難所確認、備蓄など防災意識をもち必ず来る自然災害への準備をしておくこと。備えをやった者勝ち、そしていざというときは逃げるが勝ち、さらに今回の特集記事を読んだもの勝ちだ。

自治会独自の「豪雨時緊急避難場所」の確保

編集局員 鈴木健太

避難場所に指定されている今井小学校は、校舎の2階へ避難することで、水害リスクから逃れることは出来ます。しかし、足である車が水没してしまうリスクが否めません。

そこで、今井地区連合自治会は大雨が予想される時にも車で避難が出来るように、浸水リスクの低い近隣の事業所と支援協定を結ぶことにしました。車を支援協定先に駐車し、車中泊のような形で、一時的に緊急避難をするためです。

災害リスクを少しでも抑えようとする自治会の切実な望みが伝わります。

この自治会の取り組みから「流域治水」の一端を垣間見た気がします。

▲駐車場支援協定の看板

近所で「近助」

編集局員 増田晃

『布団に入って寝ていると、避難指示の有線放送がありました。あわてて家具を屋根裏に上げ台地の上の親戚の家に逃げました。朝になって見に行くと辺り一面が水でおおわれ、平屋の我が家は一階軒下まで水に浸かっていました。片付け作業に手を付けたのはようやく3日目、同級生も駆け付けてくれました。異臭の中で家族や地域の人たちが行う片づけは、それから何日も続きました。』

これは中学校2年生の時に七夕豪雨で被災した方の話です。磐田市新貝地区にお住まいです。

災害に対して私たちは第一に身の安全を確保しなければいけません、自助です。身の安全が確保できたら周囲の人たちと助け合って生存の環境を整えます、共助です。しかし、大きな災害が発生すると公的機関による救助や援助、すなわち公助はすぐに来ない現実が多くの被災者から聞かれます。

そこで共助を補強するため、座談会で提案されたものが「近助」でした。様々な理由で地域のコミュニティが弱まる中、災害発生時こそ隣近所の結び付きが大切になることを改めて感じる言葉でした。

先人の努力が地域を守る！

編集局員 安間美恵子

繰り返される水害。過去にも多くの水害に見舞われた地域であり、そのひとつに、旧ぼう僧川も治水の記録が残っています。

その昔、旧ぼう僧川は磐田市南部の上新島（かみあらしま）から白拍子（しらびょうし）を流れ、東平松の自満開戸（じまかいど）より直角に流れを変えて、岡地区の北側で旧天竜川に流れ込んでいました。

旧ぼう僧川は、極めて貧弱でした。地盤が低いうえに排水も悪く、一度雨が降れば天竜川の水が逆流して、堤防を破壊していたのです。

そこで、天保二年、幕府の普請役として赴任した犬塚祐一郎が、治水方法を改め、水害から村民を守ってくれました。

草埼地内の犬塚橋近くには、今も犬塚祐一郎を讃えた碑が残っています。

朝起きると山が無い！

編集局員 辻克美

七夕豪雨の時、私は6歳で小学1年生。森町の大河内に住んでいました。7日の夜、たくさんの雨が降っていて、父が消防団員として出動していたので、ただ事ではないと子ども心に思っていました。

翌朝、雨が上がり外に出て見回すと、西側の山が土砂崩れで無くなっていて、びっくりした記憶があります。家が傾斜地に建っているため危険ということで、近所の安全な家に避難させてもらい数日を過ごしました。

道がすべて遮断され、陸の孤島となり、食料も小学校跡地に自衛隊のヘリコプターで運んでもらう状況でした。子どものため、近くで見るヘリコプターに感動して、災害の怖さを感じることはありませんでしたが、今思うと貴重な体験をしていたと思います。今こそ防災について学ぶべきと強く感じます。

現地調査をするよう指示を受け7月7日、森町の三倉に向かいましたが土砂崩れにより戻れず、一晩車の中で過ごしました。

原田悦寿さん

有事に備える建設業の志

編集局員 武藤君幸

災害復旧作業には、「応急復旧」と「本復旧」の二種類があります。土木工事を中心として仕事をしている地元中小建設業者の多くは、自治体と災害協定を締結しており、有事の際は自治体の要請により「応急復旧作業」の対応にあたります。

作業内容は、河川内の支障物除去、堤防等が決壊しないよう大型土のうによる補強作業、堤防などが決壊し被害が広範囲に出ている場合は、昼夜を問わず出水をいち早く抑えるよう、一致団結して作業を行っています。災害は起きて欲しくないですが、地元建設業者は、いざという時、地域のために誇りをもって仕事にあたります。